

大学生アスリートにおける家族のコミットメント

著者	佐藤 優希, 飯田 麻紗子, 榎本 恭介, 苅部 俊二, 荒井 弘和
出版者	法政大学スポーツ研究センター
雑誌名	法政大学スポーツ研究センター紀要
巻	38
ページ	5-9
発行年	2020-03-31
URL	http://doi.org/10.15002/00023594

大学生アスリートにおける家族のコミットメント

Family commitment among university student athletes

佐藤 優希 (法政大学大学院)

Yuki Sato

飯田 麻紗子 (港北もえぎ心療内科)

Asako Iida

榎本 恭介 (法政大学大学院)

Kyosuke Enomoto

荻部 俊二 (法政大学)

Shunji Karube

荒井 弘和 (法政大学)

Hirokazu Arai

要 旨

近年、アスリートを取り巻くアントラージュの存在が重要視されており、これまでアスリートと指導者との関係性については多く議論がなされてきた。一方で、重要なアントラージュであるにも関わらず、注目されることが少なかったアントラージュがある。それはアスリートの「家族」である。本研究の目的は大学生アスリートに対する家族のコミットメント（関与）の程度の検討、およびコミットメントの程度と性別、競技力との関係を調査することであった。その結果、(1) 大学生アスリートは家族のコミットメントを感じる程度が低く、(2) 女性の方が男性よりもコミットメントの程度が高く、(3) 競技力の高いアスリートの方が競技力の低いアスリートよりもコミットメントの程度が高いという結果が得られた。

キーワード：アントラージュ、コミットメント、大学生アスリート

Key words: Entourage, Commitment, University student athlete

緒言

アスリートがパフォーマンスを発揮できるように連携・協力する関係者のことをアスリート・アントラージュと呼ぶ。日本スポーツ協会ではプレイヤーの活躍を最優先とする「プレイヤーズ（アスリート）・ファースト」という概念から「プレイヤーズ（アスリート）・センタード」という概念を広めようとしている（伊藤, 2018）。これはプレイヤーに関与しているアントラージュも幸福な状態（Well-being）を目指しながら、アスリートをサポートしていくという理念である。アントラージュの1つである「スポーツ指導者」とアスリートの関係についての研究は、例えば、栗林・佐藤（2015）によるスポーツ指導者とアスリートとのコミュニケーションに関する研究や、スポーツ指導者とアスリートとの関係性を維持するための方略に関する研究（Rhind and Jowett, 2010）があり、そのほかにも複数の研究が存在する（e.g. Davis and Jowett, 2014; 飯塚ほか, 2019; Jowett, 2009; Richard et al., 2017）。

その一方で、重要なアントラージュであるにも関わらず、注目されることの少ないアントラージュがある。それは、アスリートの「家族」である。ジュニアアスリートの競技力向上には家族のサポートが必要不可欠とされ（Rees et al., 2016）、

そしてアスリートに対する親の関わり方がアスリートの情動や態度に影響を及ぼし得ることが指摘されている（武田・中込, 2003）。

近年、大学生アスリートをサポートするための試みが広がっておりつつある。大学生アスリートには競技と学業を調和させる「スポーツ・ライフ・バランス」（Arai, 2013）という考え方を意識した行動が求められる（荒井ほか, 2018）。額賀ほか（2018）によると、大学生アスリートのメンターとして最も多く回答されたのは家族であった。このように、アントラージュの中でも家族は大学生アスリートにとって重要な支援者であり、精神的、経済的なサポートを常日頃から行っていると考えられるが、その点について調査した報告は見当たらない。

そこで本研究では、大学生アスリートを対象として、家族の関与（コミットメント）の程度を検討すること、また、家族のコミットメントの程度とアスリートの性別や競技力との関連を検討することを目的とした。

方法

1. 調査対象と調査時期

本研究の対象者は、4・6年制大学の1—3年生の運動部（い

わゆるサークルは除く)に所属しているスポーツ競技者で、研究参加に同意した者とした。社会調査会社(マクロミル)の登録モニターを対象に2014年12月19—20日にインターネット調査を実施した。

2. 調査方法

本研究では、(1)大学または短期大学に所属している、(2)大学または短期大学で体育会運動部に所属している競技者(マネージャーやスタッフを除く)、(3)26歳以上の者は除外という抽出条件を設定し、モニターの個人用ページに調査の案内を掲載した。

本研究のデータは、「法政大学スポーツ・ライフ・バランス研究プロジェクト2014」で収集されたデータの一部であり、他の研究論文(Arai et al., 2016; Arai, 2017; 鈴木ほか, 2019)とデータの一部を共有している。

なお、本研究は、法政大学文学部心理学科・心理学専攻倫理委員会の承認を得て実施された。

3. 測定尺度

(1) 人口統計学的データ

性別、年齢、学年などを測定した。

(2) 家族のコミットメント

本研究では、「あなたのご家族(同居していない方も含みます)は、あなたの運動部活動に、どれくらい関与していますか?」という質問によって、家族のコミットメントの程度を尋ねた。「全く関与していない(1)」、「関与していない(2)」、「あまり関与していない(3)」、「どちらともいえない(4)」、「やや関与している(5)」、「関与している(6)」、「非常に関与している(7)」の7段階によって家族のコミットメントを測定した。家族がいない場合は、「家族はいない」という選択肢を選

ばせた。

(3) 全国的レベルの大会への出場経験

競技力の指標として、全国的レベルの大会に出場した経験の有無を尋ねた。現在のチームに関わらず、過去に出場した経験も併せて、出場経験の有無を回答させた。

4. 分析方法

全ての統計解析にはIBM社製SPSS Statistics25を使用した。性別と全国大会経験の有無による家族のコミットメントの比較には、対応のないt検定を用いた。なお、有意水準は5%未満とした。

結果

1. 対象者の人口統計学的データ

回答が明確に不適当であった1名、さらに「家族はいない」と回答した6名を除いたところ、本研究の対象者は199名となった。対象者の性別は、男子82名・女子117名であった。対象者の平均年齢±標準偏差は、19.78±1.03歳であった。

2. 家族のコミットメントの度数分布

図1に家族のコミットメントの度数分布表を示す。家族のコミットメントの度数分布は、「全く関与していない」が53名、「関与していない」が33名、「あまり関与していない」が39名、「どちらともいえない」が22名、「やや関与している」が23名、「関与している」が16名、「非常に関与している」が13名であった。過半数以上の大学生アスリートが家族の関与を感じる割合が少ない結果となった。

3. 性別による家族のコミットメントの比較

性別によって家族のコミットメントを比較した結果、男性

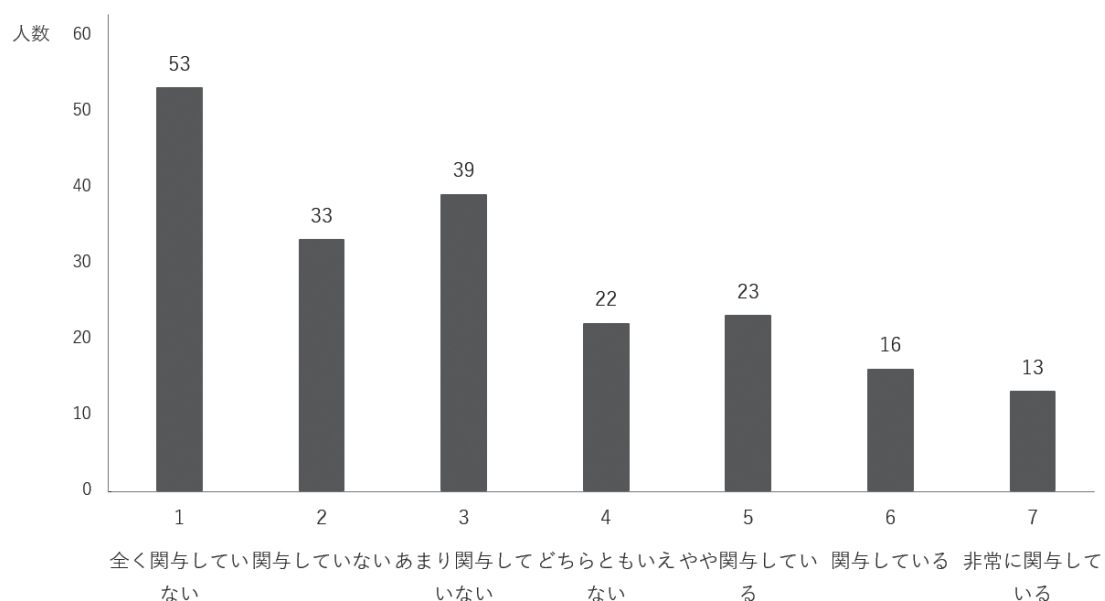


図1 家族のコミットメントの度数分布

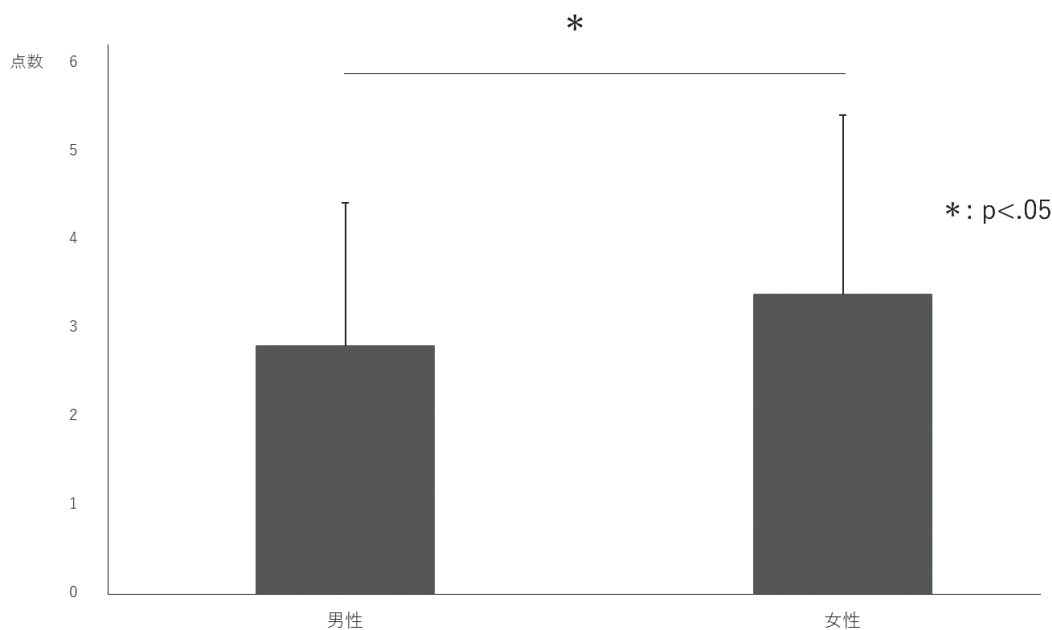


図 2 性別による家族のコミットメントの比較

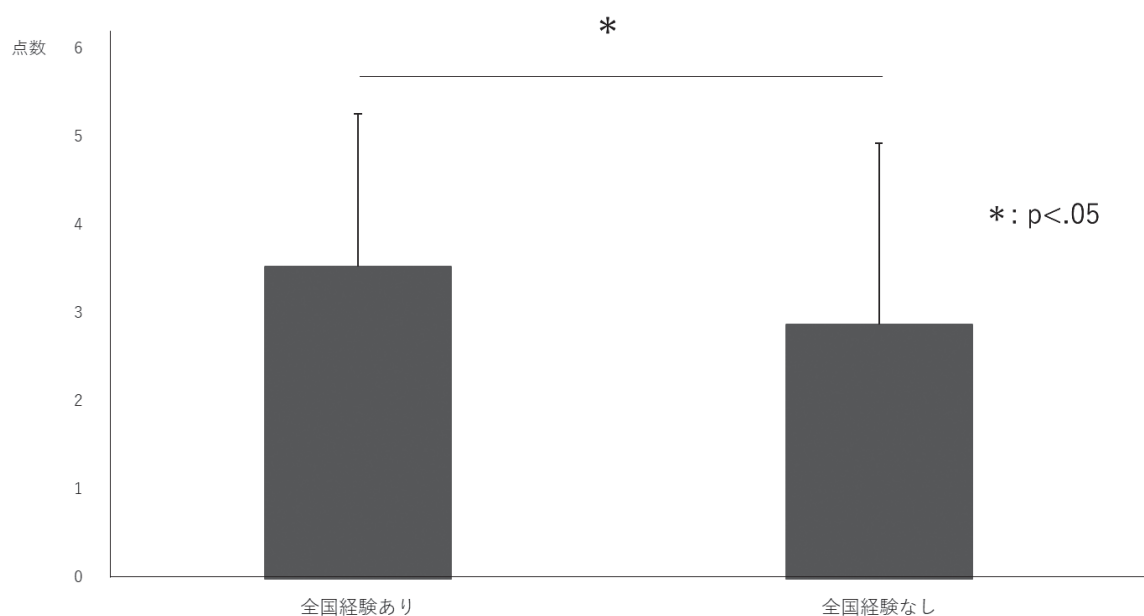


図 3 全国大会出場経験の有無による家族のコミットメントの比較

2.80 (±1.61), 女性 3.38 (±2.03) で有意差が認められた ($t(193.92) = 2.24, p < .05$, 図 2)。

4. 全国的レベルの大会への出場経験による家族のコミットメントの比較

全国的レベルの大会への出場経験の有無によって家族のコミットメントを比較した結果, 経験あり 3.54 (±1.73), 経験なし 2.88 (±2.06) で有意差が認められた ($t(146.82) = 2.36, p < .05$, 図 3)。

考察

本研究の目的は, 家族のコミットメントの程度を検討すること, および家族のコミットメントの程度と性別・競技力の関係を明らかにすることであった。その結果, 以下の知見が得られた。

まず, 大学生アスリートにおける家族のコミットメントの程度を 7 件法の質問紙によって調査した結果, 「全く関与していない」, 「関与していない」, 「あまり関与していない」, 「どちらともいえない」を選択した対象者は 147/199 名であり, 家族のコミットメントが少ないと感じる割合が多かった。

青年期に該当する大学生年代では、自立に対する意識が増加する時期である（渡辺，1990）。福島（1992）によると、（心理的）自立とは「親や他の大人への完全な依存から脱却し、一人の人間として大人社会の一員になる過程とする」とし、「単に自己の確立のみを意味するのではなく、社会を構成する一員として望ましい行動規範を獲得し、他者・社会との調和をはかり、社会を維持することに貢献できること」と定義した。具体的には精神的自立と社会的自立の2側面から成り立つものと定義される場合もある（小田，2009）。高富・桂田（2011）によると、青年期における自立を検討する上での概念として、精神的自立、経済的自立、生活的自立の3つの要素があると考えられており、自立に対する意欲に直接的に関与する精神的自立には、親の養育態度が影響することが指摘されている。また大学生年代は親に経済的に依存しているものの、大学生活を通して関わる人間が多様化することや選挙権の獲得、成人を経て飲酒・喫煙の経験、国民年金への加入などを通して社会的責任を負うことにより少しずつ自立していくことが考えられる。そのため、青年期である大学生アスリートにおいても自立に対する意識が増加することに鑑みると、家族のコミットメントが少ないと感じる割合が多いことは自然なことである。また、福島（1997）も指摘するように、人は社会の中で他者と協力し合いながら社会生活を営んでいく存在であり、「自立する」ということは独りで何事も解決していくのではなく、他者と良好な関係を構築し、維持していくことも自立する上で重要な側面である。したがって、大学生年代のアスリートは大学での生活だけではなく競技者としての側面も持ち合わせており、様々な人間との出会いによって自我が形成され、コミュニティが広がることにより自立が促進されていくことが考えられる。

家族のコミットメントと性別の関係では女性（ 3.38 ± 2.03 ）の方が男性（ 2.80 ± 1.61 ）よりも家族のコミットメントを感じる程度が高いことが示された。このような結果となった要因として、女性は男性に比べて、周囲の人間や家族と協調的・共生的な関係を重視することが考えられ（大石・松永，2008）、日本社会におけるジェンダー的役割が反映されているのではないかと推察される。福島（1997）は自立している際に重要視している要因をとりあげ、各要因に対する重要度の違いを性差および年齢差によって比較、検討している。この要因とは主に経済的自立、身辺自立、精神的自立、対人的自立に分類され、この中でも男性は特に「経済的自立」を重要視する傾向があり、一方で女性は「身辺自立」を重要視する傾向がある。これは男女相互に認識が一致しており、つまり男性は女性の自立に関して「身辺自立」を重視し、女性は男性の自立に関して「経済的自立」を重視するという相互にジェンダー的役割を当てはめていることも明らかにしている。これは一般に、「男性は外に出稼ぎに、女性は家で家事」といった通念が浸透していることを示す。このようなジェンダー的役割を考慮すると、女性の方が男性よりも家族との関わりを重要視していることが考えられ、家族のコミットメントの程度に違いが生

じたと考えられる。

競技力との関連においては、全国的レベルの大会を経験したことのある者（ 3.54 ± 1.73 ）の方が経験のない者（ 2.88 ± 2.06 ）よりも家族のコミットメントが高い結果となった。スポーツタレント発掘・育成に関する論文や書籍をレビューした Rees et al. (2016) によれば、コーチによるサポートだけではなく家族や兄弟、保護者のサポートが競技力向上に不可欠であることが示唆されている（e.g. Roland et al., 2019; Côté, 1999）。そしてこれらの関係者が包括的にサポートすることにより競技レベルの高い選手の発掘・育成に繋がることも指摘されている（Rees et al., 2016; Knight et al., 2017）。これらの報告に鑑みると、アスリートを取り巻く関係者の重要性は、特に競技を始めて間もないジュニアアスリートにおいて重要であり、これは低年齢期に神経系の発達が顕著であることが大きな要因の1つであろう。本研究における競技力の指標は、全国大会への出場経験の有無とし、現在のチームに関わらず、過去に出場した経験も併せて、出場経験の有無を回答させた。そのため、本研究ではいつの時点で全国大会へ出場しているかは不明であった。しかしながら、競技力の高いアスリートの方が競技力の低いアスリートよりも家族のコミットメントが高いため、家族のサポートの重要性を示唆する結果となった。

結論および今後の展望

本研究の目的は、家族のコミットメントの程度を検討すること、および家族のコミットメントの程度と性別・競技力の関係を明らかにすることであった。その結果、(1) 大学生アスリートにおいては家族のコミットメントを感じる程度が低く、(2) 女性の方が男性よりもコミットメントの程度が高く、(3) 競技力の高いアスリートの方が競技力の低いアスリートよりもコミットメントの程度が高いという結果が得られた。今後の研究では、大学生アスリートへの家族のコミットメントを心理的・経済的・社会的要素に細分化し、コミットメントの方法を詳細に検討することが期待される。また、競技力の指標に関して、競技成績を時系列的に抽出することによって得られる情報も変化し、より詳細に家族のコミットメントを検討できるであろう。

謝辞

本研究は、平成30年度—令和元年度科学研究費補助金 基盤研究(C)「大学生アスリートの価値の明確化を促す心理サポートプログラムの開発」、平成26—28年度科学研究費補助金 基盤研究(C)「大学生競技者の生活支援マニュアルの開発：スポーツ・ライフ・バランスの実現に向けて」から援助を受けました。関係各位に感謝申し上げます。

引用文献

Arai, H. (2017) The effect of romantic relationships on collegiate athletes' lives with special attention to gender differences. *European Journal of Physical Education and*

- Sport Science, 3 (7) : 38-50.
- Arai, H. (2013) Involvement of College Athletes in Sports for People with Disabilities, *International Journal of Sport Health Science*, 11: 101-108.
- 荒井弘和・深町花子・鈴木郁弥・榎本恭介 (2018) 大学生アスリートのスポーツ・ライフ・バランスに関連する要因—デュアルキャリアの実現に向けて—, *スポーツ産業学研究*, 28 (2) : 149-161.
- Arai, H., Suzuki, F., and Akiba, S. (2016) Perception of Japanese collegiate athletes about the factors related to mentoring support. *Journal of Physical Education Research*, 3 (4) : 12-24.
- Côté, J. (1999) The influence of the family in the development of talent in sport. *The Sport Psychologist*, 13 (4) : 395-417.
- Davis, L. and Jowett, S. (2014) Coach-athlete attachment and the quality of the coach-athlete relationship: implications for athlete's well-being. *Journal of Sports Sciences*, 32 (15) : 1454-1464.
- 福島朋子 (1992) 思春期から成人にわたる心理的自立—自立尺度の作成及び発達の検討—, *発達研究*, 8: 67-87.
- 福島朋子 (1997) 成人における自立観: 概念構造と性差・年齢差. *仙台白百合女子大学紀要*, 1: 15-26.
- 飯塚駿・遠藤俊郎・三井勇・安田貢 (2019) 全日本高校選抜合宿参加バレーボール選手の心理的特性に関する研究—競技経験年数, 現在のポジション継続年数とTSMI, SCAT, MPIに着目して—, *山梨学院大学スポーツ科学研究*, 2: 39-42.
- 伊藤雅俊 (2018) *Sport Japan 2018 09-10 (Vol.39)*. 公益財団法人日本スポーツ協会, 2-3.
- Jowett, S. (2009) Validating coach-athlete relationship measures with the nomological network. *Measurement in Physical Education and Exercise Science*, 13: 34-51.
- Knight, C.J., Berrow, S.R. and Harwood, C.G. (2017) Parenting in sport. *Current Opinion in Psychology*, 16: 93-97.
- 栗林千聡・佐藤寛 (2015) Coach-Athlete Relationship Maintenance Questionnaire—アスリート版のジュニアテニス選手への適用の試み—, *スポーツ心理学研究*, 42 (2) : 93-102.
- 額賀将・鈴木郁弥・秋葉茂季・飯田麻紗子・荒井弘和 (2018) 大学生アスリートが考えるメンターと競技・日常生活で求めるメンタリング, *スポーツ産業学研究*, 28 (1) : 75-84.
- 小田美紀子 (2009) 青年期の心理的自立に関する国内文献レビュー, *鳥根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要*, 3: 123-135.
- 大石美佳・松永しのぶ (2008) 大学生の自立の構造と実態—自立尺度の作成—, *日本家政学会誌*, 59 (7) : 461-469.
- Rees, T., Hardy, L., Güllich, A., Abernethy, B., Côté, J., Woodman, T., Montgomery, H., Laing, S., and Warr, C. (2016) The Great British medalists project: A review of current knowledge on the development of the world's best sporting talent. *Sports Medicine*, 46 (8) : 1041-1058.
- Rhind, D. J. A., and Jowett, S. (2010) Relationship maintenance strategies in the coach-athlete relationship: The development of the COMPASS model. *Journal of Applied Sport Psychology*, 22: 106-121.
- Richard, C, Thelwell, Christopher, R, D, Wagstaff, Michael, T, Chapman, and Göran Kenttä. (2017) Examining coaches' perceptions of how their stress influences the coach-athlete relationship. *Journal of Sports Sciences*, 35 (19) : 1928-1939.
- Roland, S., Claudia, Z., Marc, Z., and Achim, C. (2019) Science or coaches' eye?—Both! beneficial collaboration of multidimensional measurements and coach assessments for efficient talent selection in elite youth football. *Journal of Sports Science and Medicine*, 18: 32-43.
- 鈴木郁弥・清水智弘・泉重樹・荒井弘和 (2019) 大学生アスリートは受傷したチームメイトをどう認知しているか? 埼玉アスレチック・リハビリテーション研究会誌, 10: 21-25.
- 高富莉那・桂田恵美子 (2011) 大学生の心理的自立と親の養育態度との関連, *臨床教育心理学研究*, 3 (37) : 27-32.
- 武田大輔・中込四郎 (2003) 子供に対する親の行動に伴うメッセージと競技における子供の認知・情動的態度との関係: ジュニアサッカー選手を対象として, *体育学研究*, 48 (4) : 421-438.
- 渡辺恵子 (1990) 自立の概念化への試み, *日本女子大学人間社会学部紀要*, 1: 189-206.